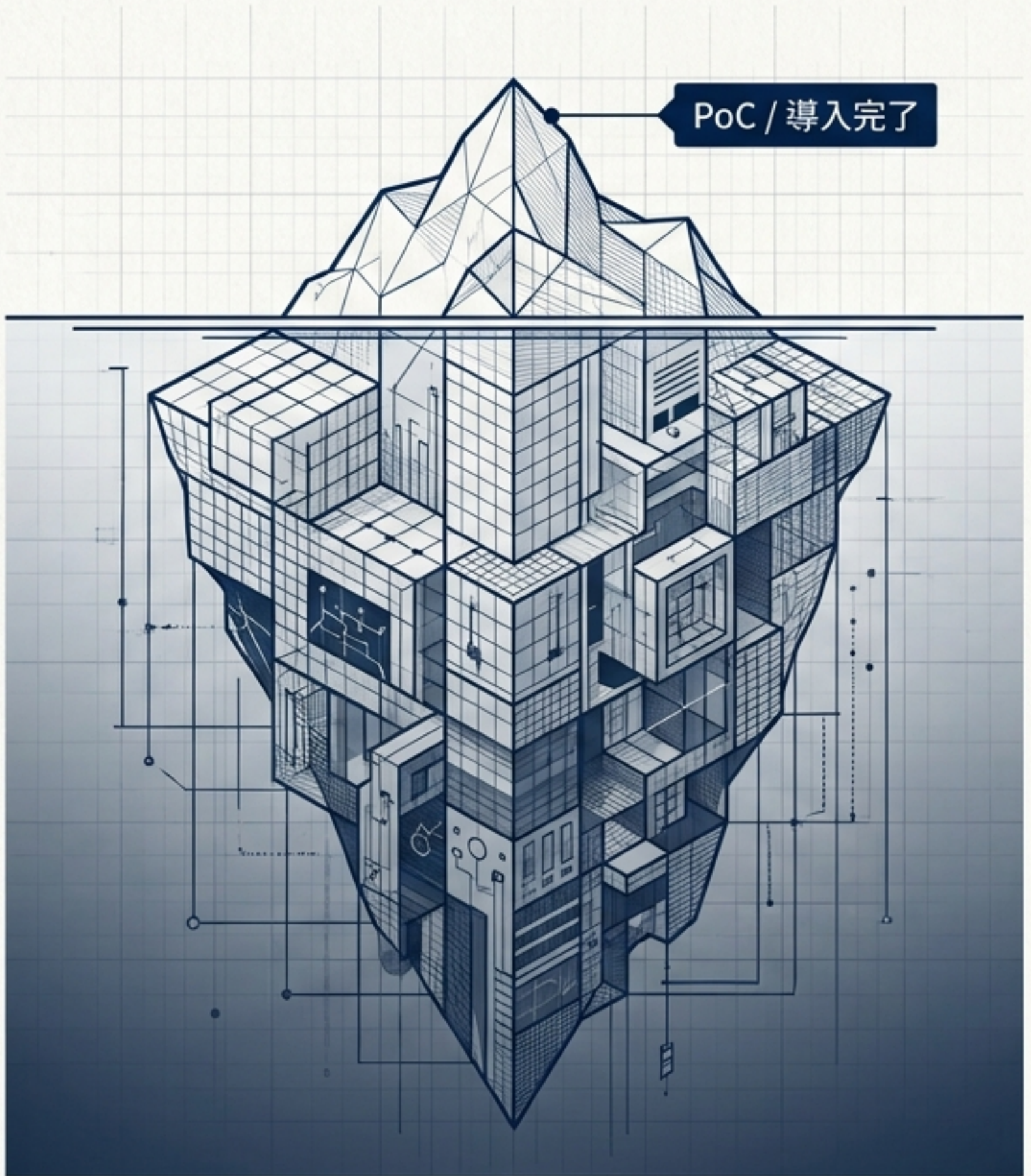




PoC / 導入完了

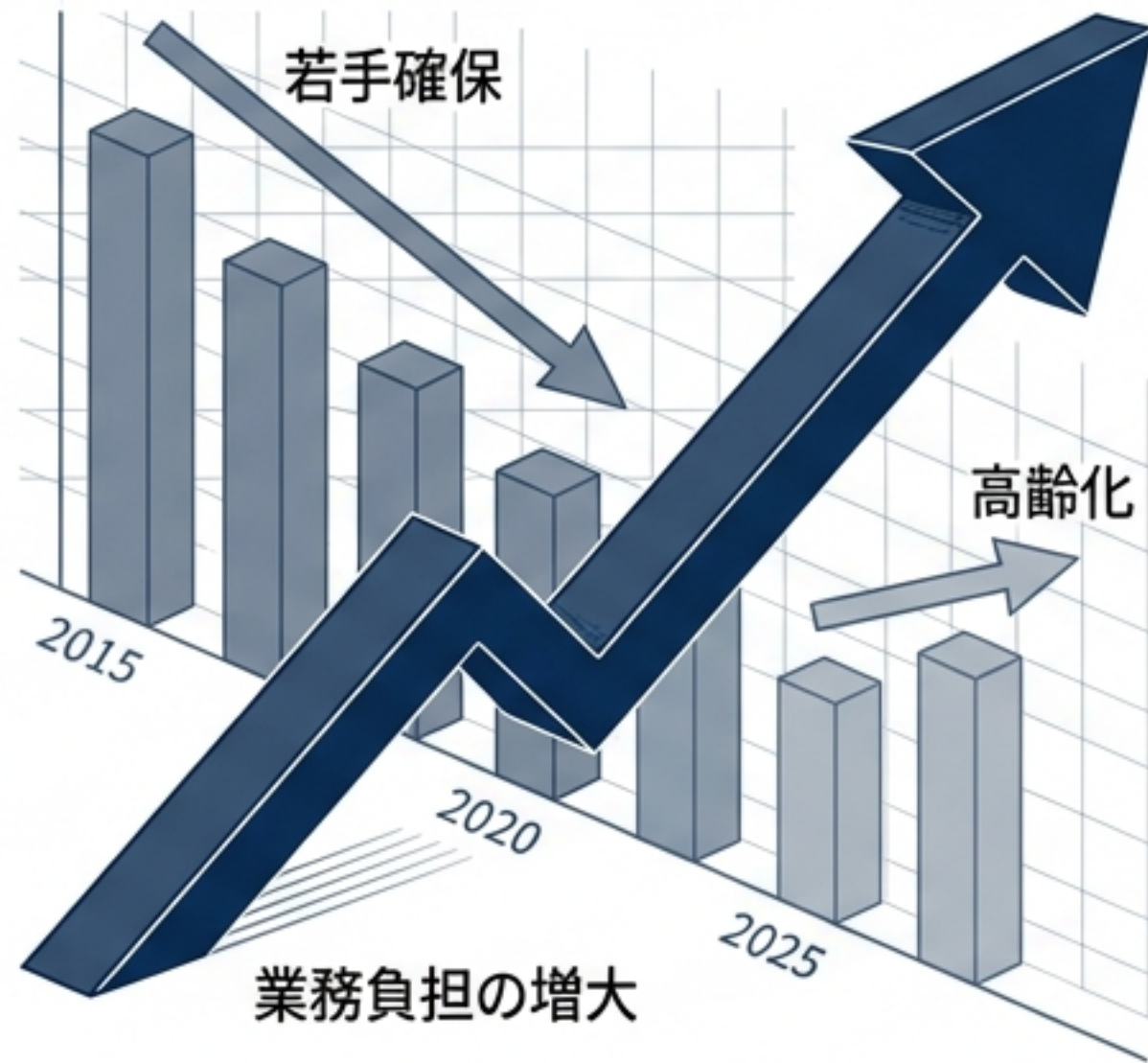
生成AI導入はゴールではない：知財業務における「導入後の4つの壁」と次世代組織への変革

オムロンの全社横断プロジェクト「AIZAQ」に学ぶ、組織OSのアップデート戦略

AIの実証実験（PoC）完了後に待ち受ける真の課題と、それを乗り越えるための経営・組織論。

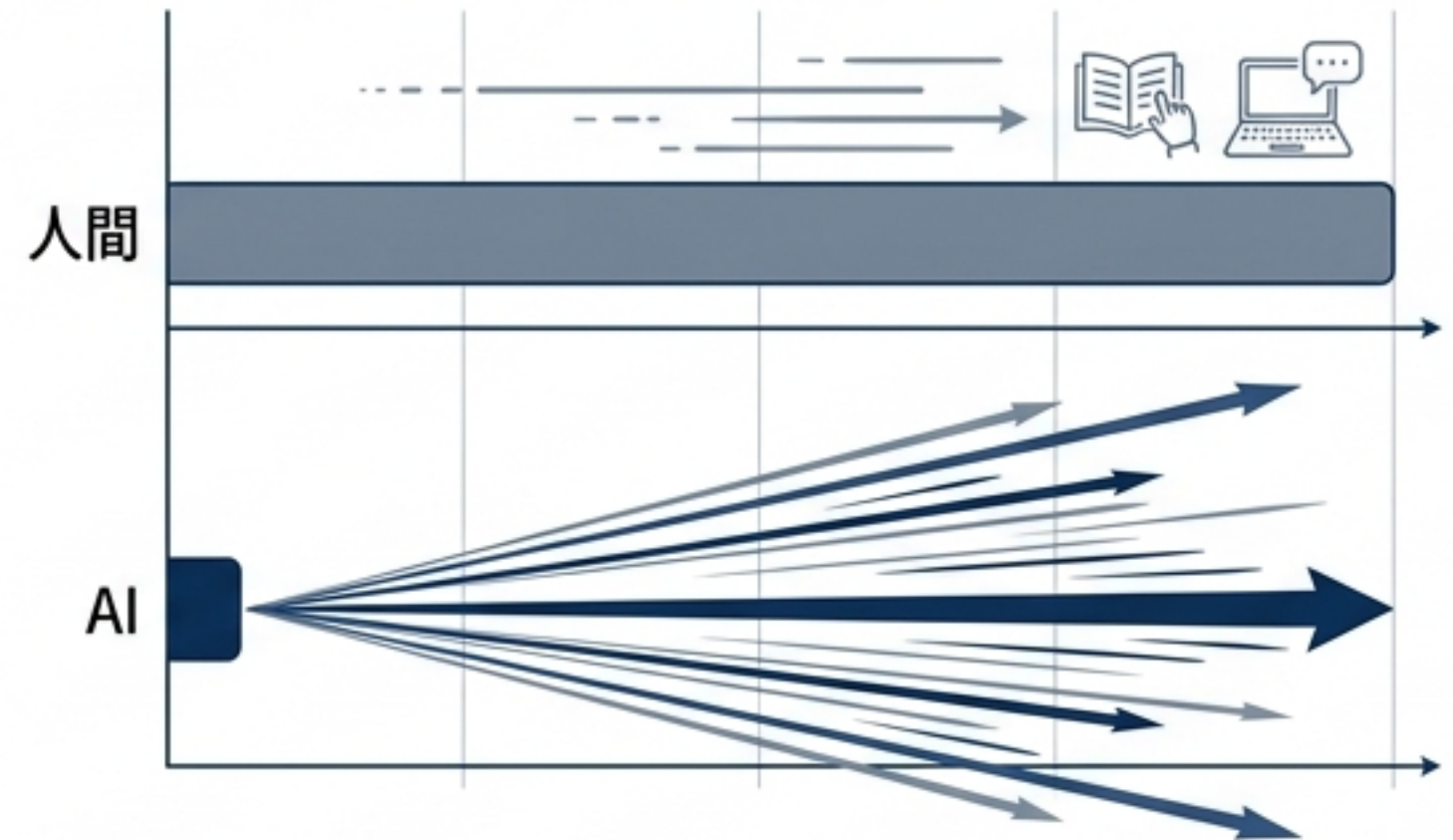
属人的モデルの限界界と、生成AI導入の「不可逆的な必然性」

構造的危機



弁理士・特許技術者の高齢化と若手確保の困難化により、一人当たりの業務負担が増大。

唯一の解決策

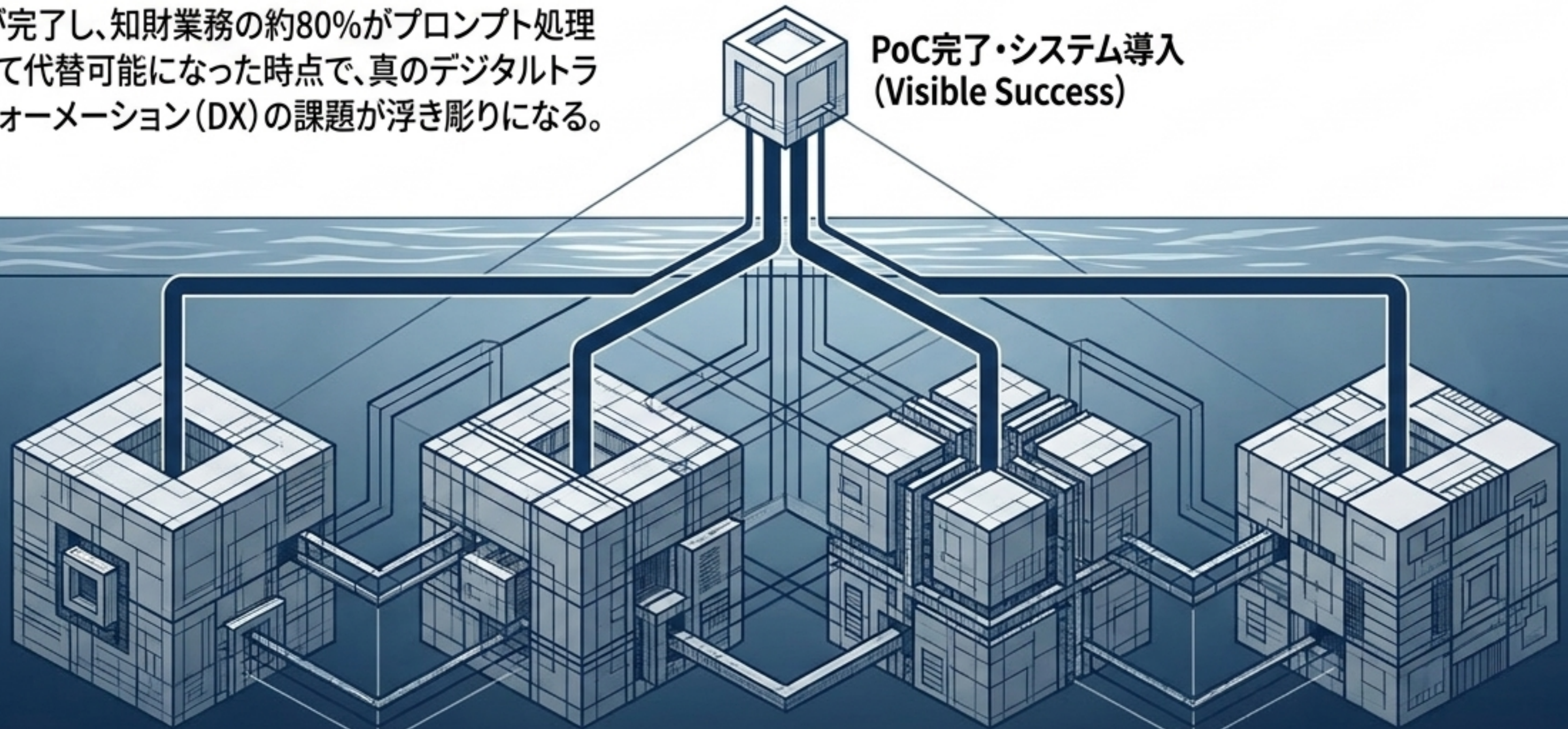


- 先行技術文献の読解や明細書作成において、AIは圧倒的な処理速度を誇る。
- パラダイムシフト：業務の効率化は、必然的に知財担当者の「既存の役割の空洞化」と「存在意義の再定義」をもたらす。

実装は「出発点」に過ぎない：水面下に潜む4つの巨大な壁

導入が完了し、知財業務の約80%がプロンプト処理によって代替可能になった時点で、真のデジタルトランスフォーメーション(DX)の課題が浮き彫りになる。

PoC完了・システム導入
(Visible Success)



1. 活用停滞
(リテラシーの壁)

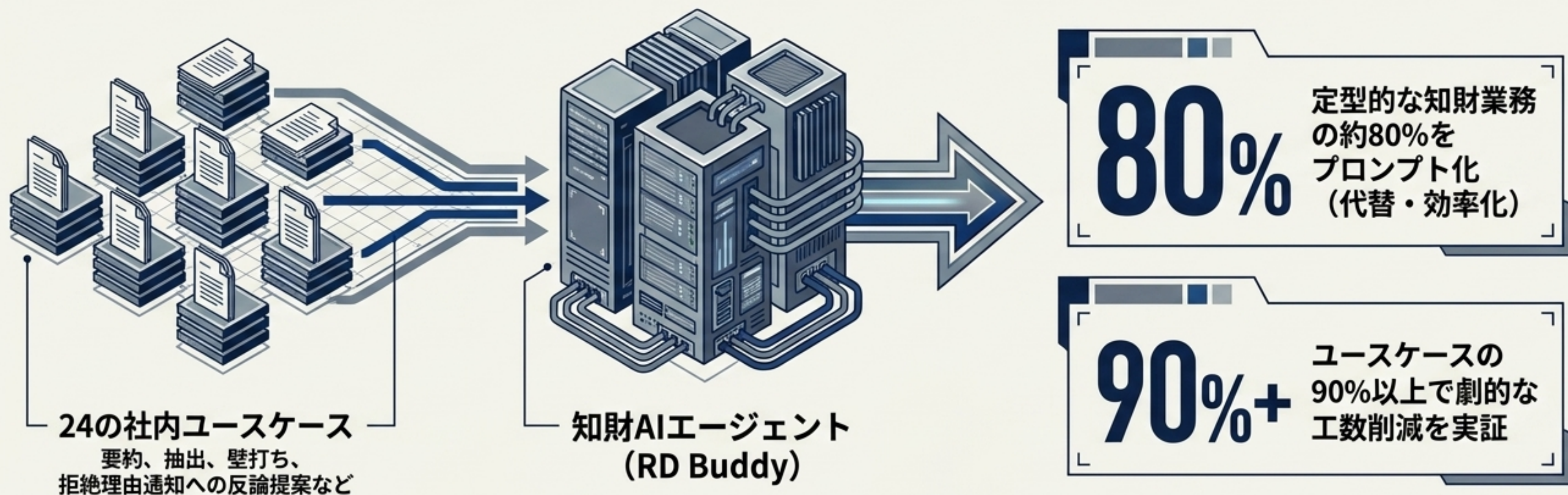
2. 暗黙知の統合
(データの壁)

3. ハルシネーションと
専門性の再定義 (倫理の壁)

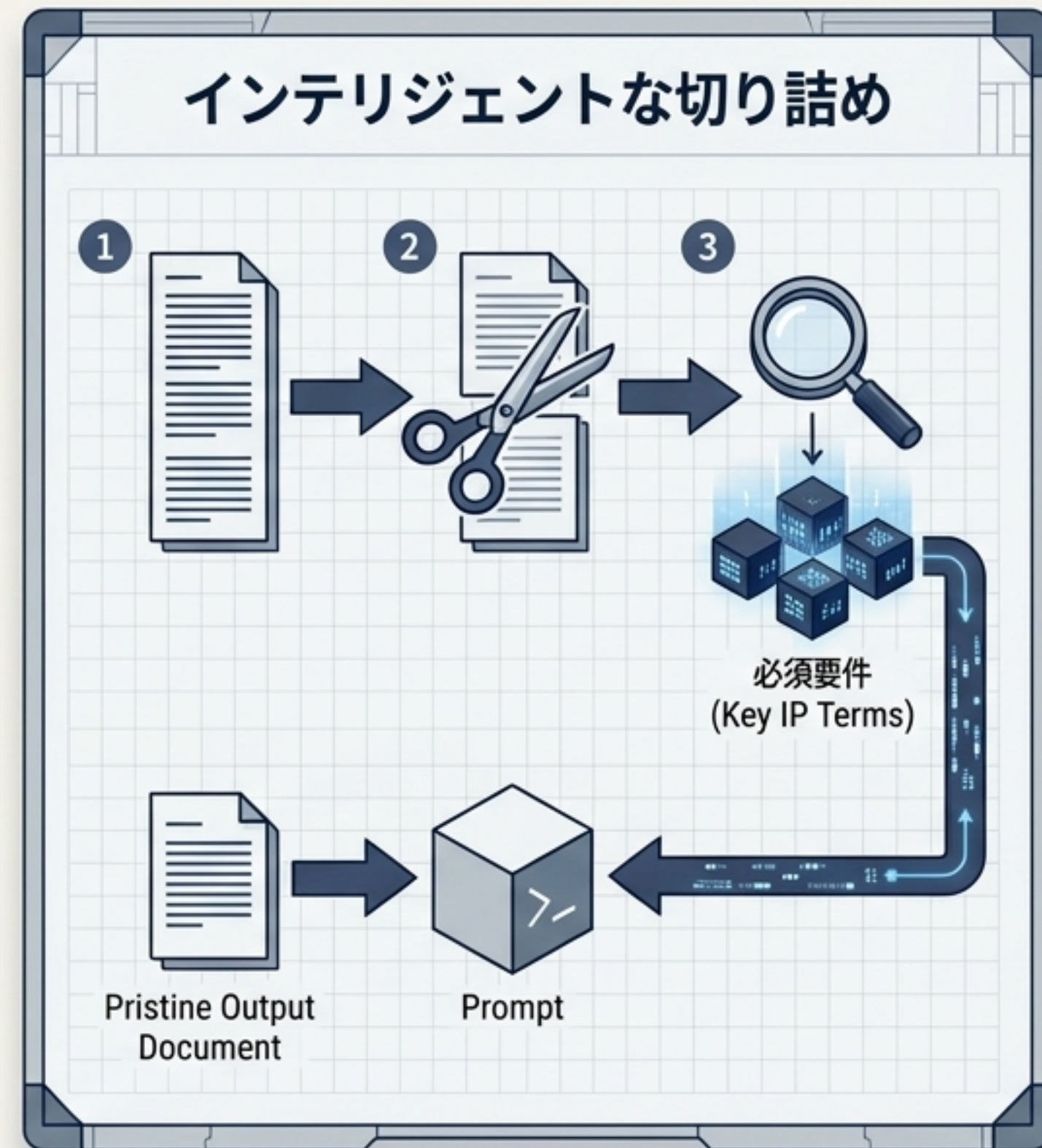
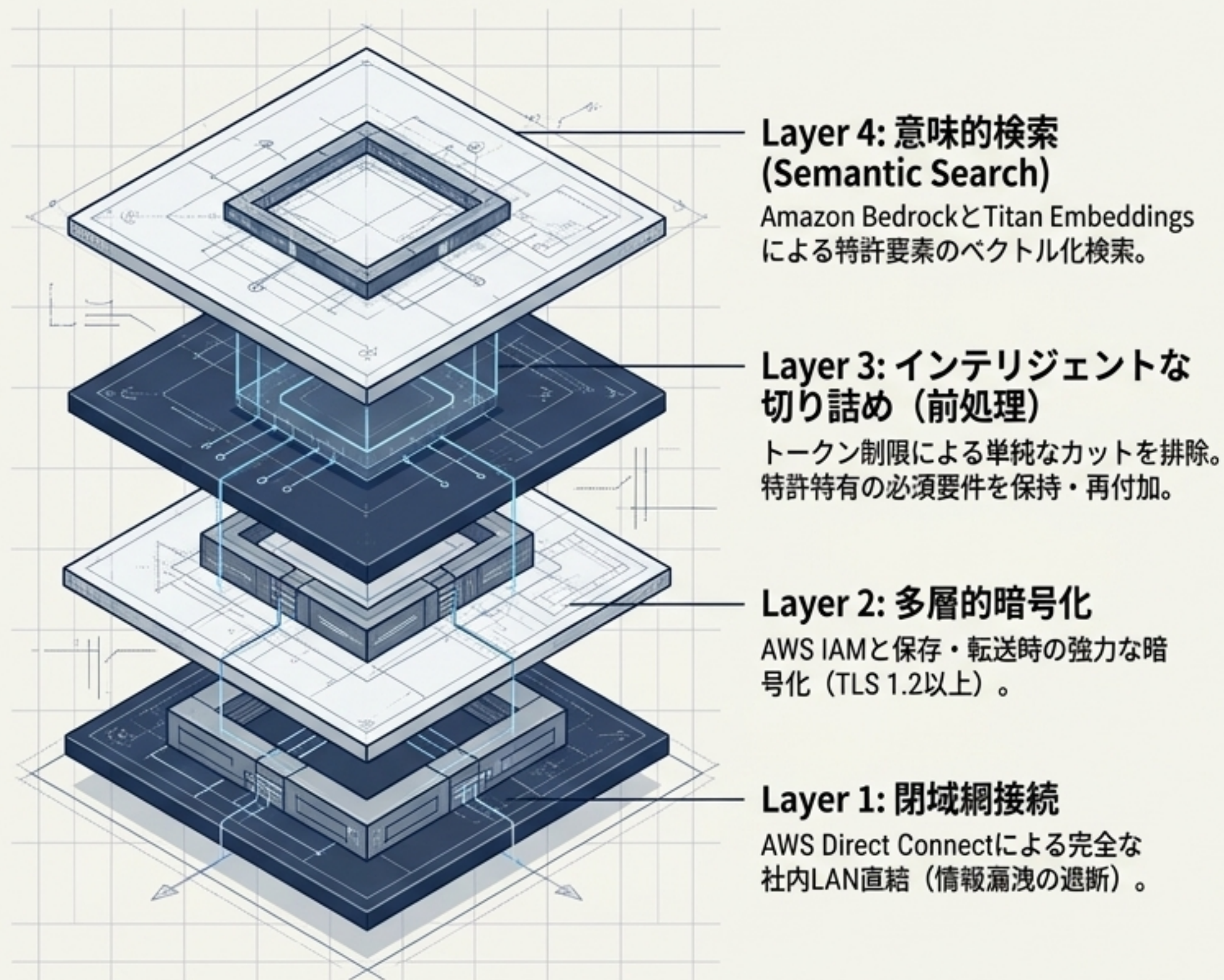
4. 業界横断のガバナンス
(法規制の壁)

オムロンの基盤：スクラッチ開発による「知財AIエージェント」の実装

既存のSaaSに依存せず、業務要件に完全に最適化されたシステムを
独自構築することで、抜本的な業務プロセスの見直しを実現。

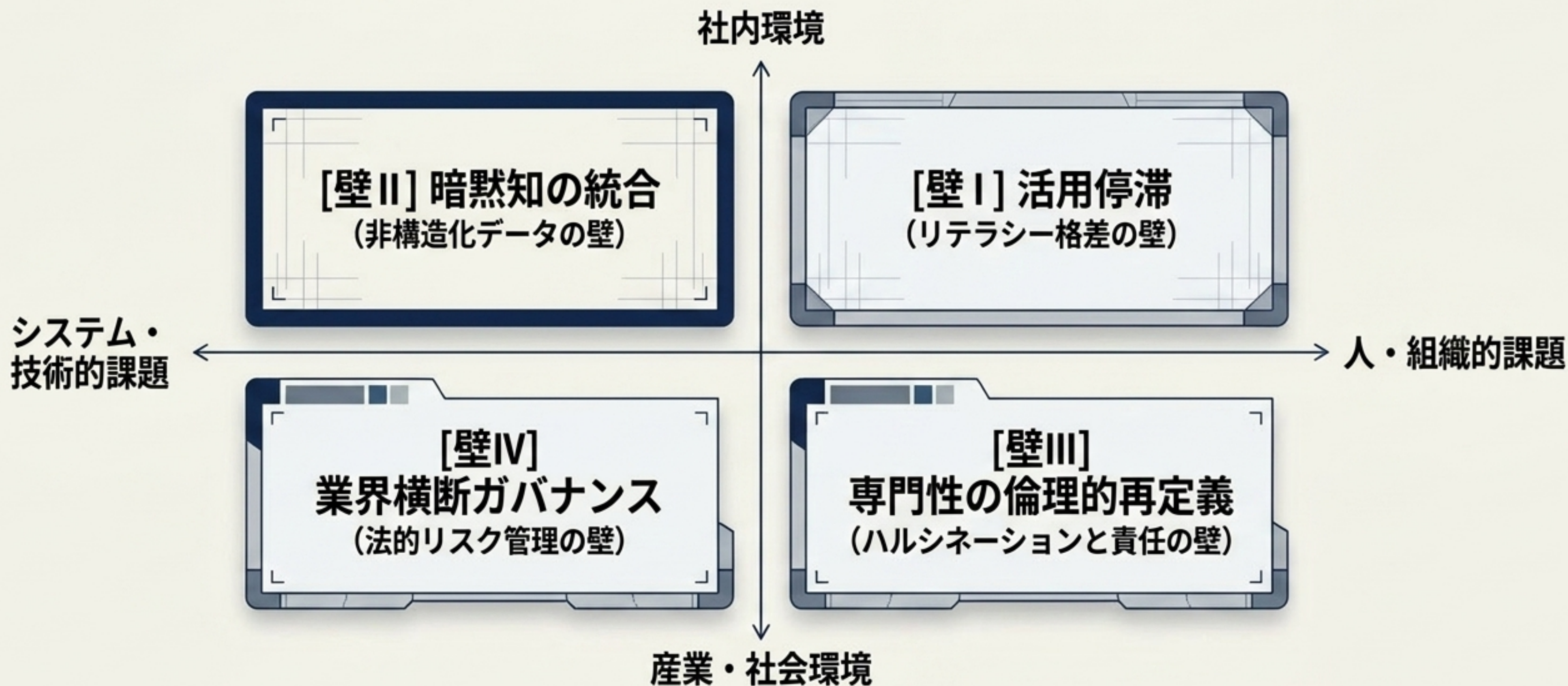


導入直後に直面する「セキュリティ」と「特許精度」への技術的防波堤



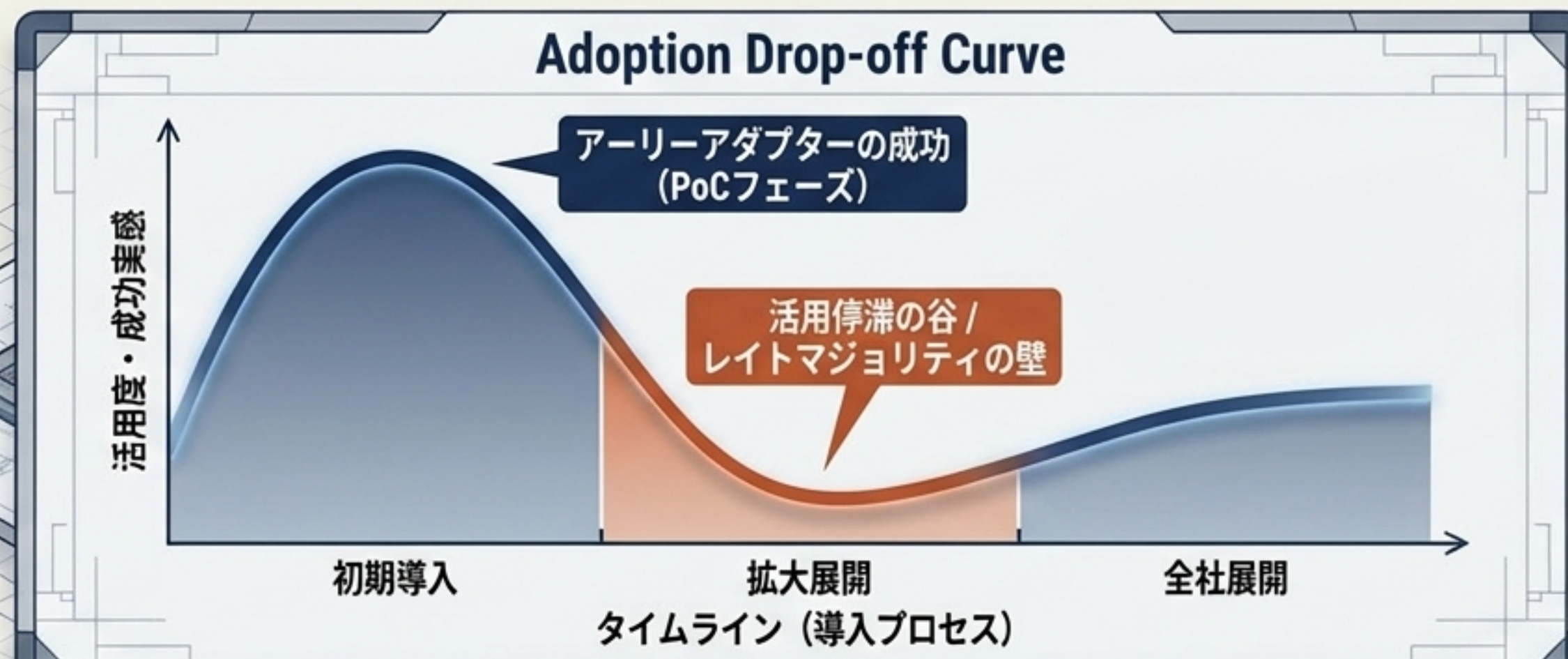
導入後に立ちはだかる4つの壁：構造的マッピング

ここから、それぞれの壁とオムロンの解決策（ソリューション）を深掘りする。



[壁Ⅰ] 活用停滞：従業員のリテラシー格差という最初の障壁

生成AIは「決定論的（ボタンを押せば結果が出る）」なシステムではなく、
「確率論的（プロンプトの質で結果が変動する）」なシステムである。



The Problem

知財という高度な専門領域において、適切なコンテキスト（技術的背景、法的制約）
を言語化できなければ、実務に耐えうる回答は得られない。
「思ったような回答が出ない」という心理的・技術的壁が利用率を急落させる。



解決策：全社横断プロジェクト「AIZAQ」による組織OSの変革

手挙げ方式とWILL

強制ではなく、熱意（WILL）を持つ社員の自発的参加を促す
（現在Season 6、累計1,200名超が参画）。

称賛の文化

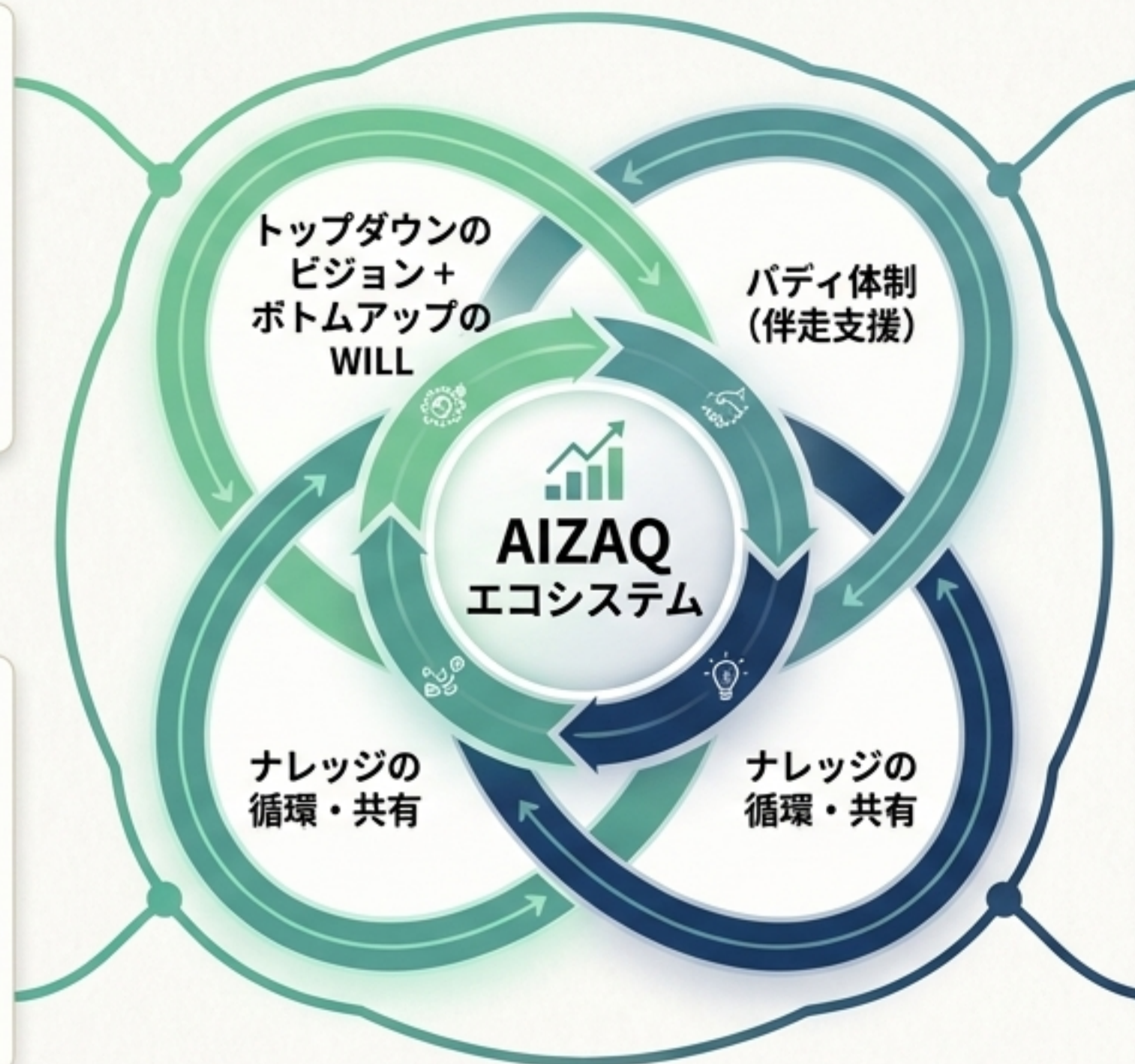
イベント「AIZAQ KUDOS」で挑戦を全力で称え、モチベーションを恒久的に維持。

バディ体制

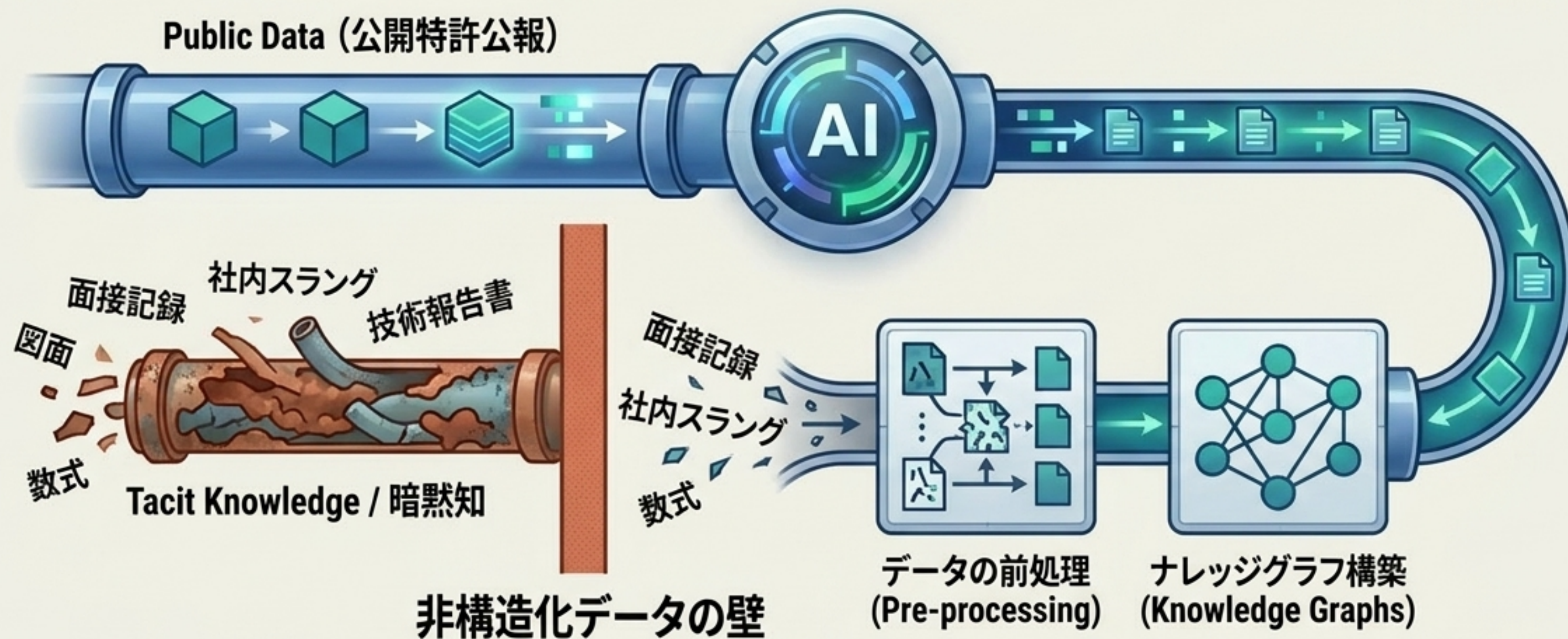
業務課題を持つ現場担当者と、AI支援者を組み合わせる伴走型支援。

ナレッジの循環

成功体験だけでなく、「失敗談」や「行き詰まりのプロセス」も社内でオープンに共有。

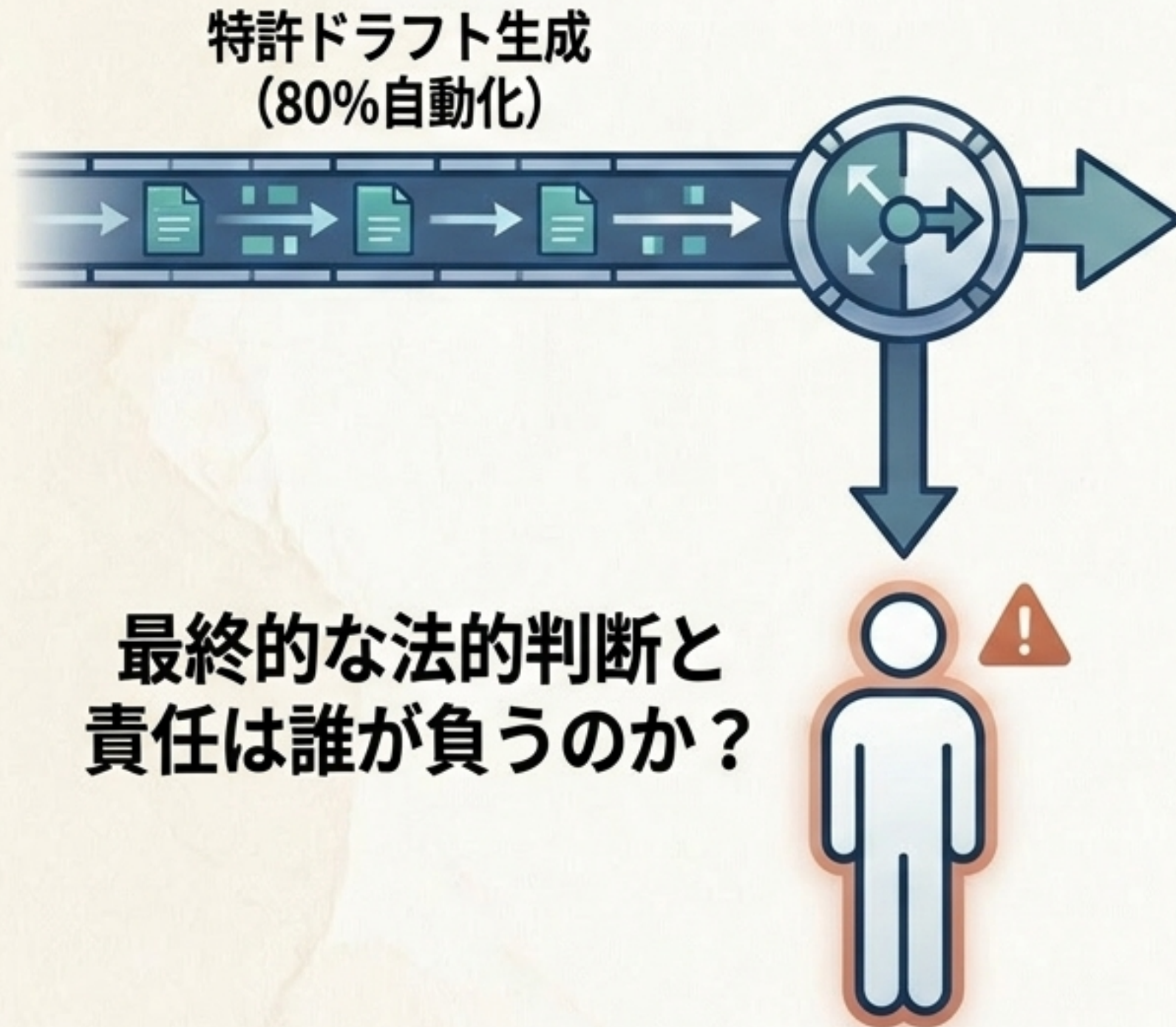


[壁 II] 暗黙知の統合：実証実験から「専属エージェント」への移行



過去の拒絶理由通知への対応履歴、固有の専門用語、非構造化データ（図面や数式）をAIが理解できるベクトルデータに変換し、意図した文脈で引き出せるようにする技術的ハードル（現在、実証実験中）。

[壁 III] ハルシネーションと「専門性」の倫理的再定義



The Risk

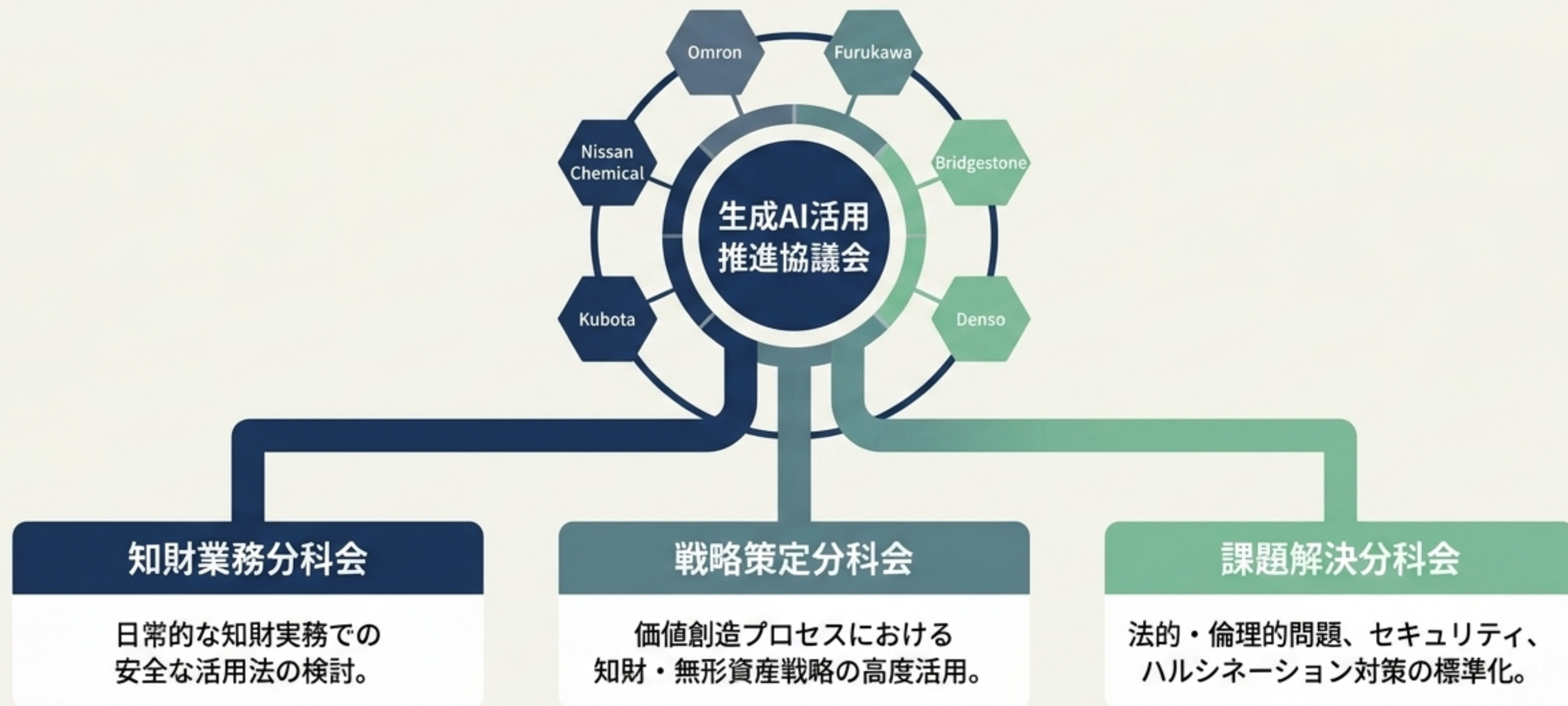
特許クレームの厳密な定義や侵害リスク判定（FTO調査）において、もっともらしい虚偽情報（ハルシネーション）を看過することは、事業を致命的な法的リスクに晒す。

Role Shift: 戦略立案型人材へのリスクリング

- クリティカル・シンキング: AIのアウトプットの論理的飛躍を見抜く力。
- 戦略的評価能力: 経営戦略と照らし合わせて採用を判断する力。

[壁 IV] 業界横断のガバナンス構築：集合知による法的リスク管理

著作権侵害、プライバシー保護、営業秘密の漏洩といった継続的な脅威に対し、一企業単独でのルール作りには限界がある。



統合と進化：生成AI導入による知財業務のパラダイムシフト

従来型知財業務	生成AI導入期	次世代価値創出型知財
・ 権利保護 (バックオフィスとしての守り) ・ 手動検索 ・ 調査・申請	・ データ分析 ・ AI意味検索 (定型業務の効率化) ・ 戦略立案	・ 価値創造 ・ 予測分析 ・ 意思決定支援 (経営戦略のナビゲーターとしての攻め)

未来への展望：エージェンティックAIと「GEO」の時代



Agentic AIの4特性

プロアクティブ（主体的）、適応可能、協調的、専門的。

GEO（Generative AI Optimization）

人間の役割は、AIという未知の領域に対する戦略立案（GEO）や複雑な合意形成など、最も高度で創造的な活動（人が生きるオートメーション）へとシフトする。

結論：生成AI導入は「ツールの更新」ではない。 「組織OSのアップデート」である。

システムの導入完了で立ち止まる企業は、一時的な工数削減と引き換えに深刻な副作用に直面する。

真の生成AI活用とは、最先端のテクノロジーの導入と同時に、組織の文化、教育体制、コミュニケーションの在り方を根本からアップデートし続ける「終わりのないプロセス」である。

「機械にできることは機械に任せ、人間はより創造的な活動を楽しむべきである」——AIを事業価値を共に創出する戦略的パートナーとして受容することこそが、不確実な未来における唯一の解である。